早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨
(2863-2)

W
学位論文
2863
2

博士（人間科学）学位論文 概要書

人口高齢化と高齢者の生活に関する研究

１９９９年７月

早稲田大学大学院人間科学研究科

嵯 峨 座　晴 夫

論文の概要

本研究は、第１に、日本人口の高齢化の進展についてその要因と帰結の分析を行うとともに、第２に、それがもたらした高齢社会状況における高齢者の生活実態をライフスタイルの視点から解明することを主な目的としている。前者、すなわち人口高齢化の分析は、高齢社会の基礎を構成する人口に関するマクロ分析であり、後者は高齢社会の主要なアクターとしての高齢者の生活に関するミクロ分析を志向するものである。そして、第３に、本研究は高齢化研究のマクロ分析とミクロ分析の統合の可能性を追究することもねらいとしている。

周知のように、日本では戦後の高度経済成長とそれにともなう全体社会の構造変動の過程において人口高齢化が急速に進むことになった。人口高齢化は、人口の中に占める高齢者の割合が増大することを意味しており、それ自体はすぐれて人口構造上の現象であり、極めてデモグラフィックな過程である。しかし、ことはそこにとどまるわけではなく、人口高齢化は、社会や経済の多面にわたって大きな変化をひき起こすことになり、その結果、人々とりわけ高齢者の生活にもインパクトを与えることになる。

このように、20 世紀の後半において顕著なトレンドとして立ち現れてきた人口高齢化は、日本の社会・経済の制度や規範に影響を与え、人々の生活の仕方や意識に革命的といえるほどの変化をもたらしたが、いま１つ無視することのできないトレンドとして、この人口高齢化の潮流が世界の先進諸国はもとより、発展途上の諸国にまで押しよせていることである。いまや人口高齢化は、段階の差こそあれ、人類共通のトレンドとして姿を現しているのである。その意味で、人口高齢化研究は、一国の社会・経済の発展（近代化）という時間軸上の変化の文脈で捉えるだけでなく、広く世界あるいは人類が直面するメガトレンドとしてのパースペクティヴの中に位置づけてみる必要が生じてきているのである。現代的な課題としての人口高齢化研究の意義はそこにある。

本論文は３部からなる。第１部は「人口高齢化の統計的分析」、第２部は「高齢者のライフスタイルに関する研究」、第３部は「人口高齢化の国際比較」である。第１部は、人口センサスのデータを用いたマクロ分析であり、第２部は主として、生活実態調査と世論調査のデータを用いたミクロの分析である。そして、第３部は、先進諸国の間の比較とアジアの発展途上諸国の間の比較をマクロ・データを用いて行うとともに、それらの地域における高齢化（者）問題にマクロとミクロの両面からアプローチする。

第１部では、日本人口の高齢化の現状分析が課題であり、「エイジングの人口学」(demography of aging)がその主題である。まず、第１章において人口学に

おける高齢化研究の成果をふまえたうえで、分析の枠組みを提示する。図式化されたこの枠組みは、日本のみならず、その他の先進諸国、発展途上諸国にも妥当するし、また地域社会の高齢化研究、ミクロとマクロの両側面へのアプローチにも適用できるように設計されている。また、第1章第4節では、過去20年間におけるわが国の高齢化研究のサーベイを広く行い、今日にいたる研究の発展をあとづける。このように先行研究を整理することによって、本論文の第1部、第2部、第3部の研究の位置づけが明確になると考えたからである。

第1部第2章以下では、全国人口、地域人口、高年齢人口の3つのレベルに焦点を当てて分析を行う。すなわち、第2章は、全国人口のレベルでみた人口高齢化の推移と将来予測であり、第3章は地域人口の高齢化に焦点を当てている。そして、第4章は、人口高齢化の直接的要因として出生、死亡、移動の3つをとりあげ、それらと人口高齢化の関係を検証する。第5章と第6章では、高齢社会の中での高齢者の姿を鮮明にするために、世帯と社会的属性の2つの変数をとりあげ、構造分析を行う。これは、高齢者の生活の基礎的条件を解明するものであるが、このような高年齢人口の構造分析はこれまでほとんど行われてこなかった。

第2部では、高齢者の生活をとりあげる。とはいえ、生活は人間の生命活動全般にかかわるもので、広義にすぎるので、ここでは生活の仕方のパターンとしてのライフスタイルをとりあげることにより、高齢社会状況の中で高齢者の生き方が問われる現実にアプローチしようと試みた。高齢者のライフスタイルとは「高齢者の集団全体あるいは何らかの基準により明確に確定できるその下位集団にみられる、高齢者の生活の諸次元、すなわち生活行動、生活時間、生活態度や生活意識の顕著な傾向」である。

第3部は、人口高齢化と高齢化（者）問題の国際比較が主題である。第15章は、欧米先進諸国と日本の比較である。第16章は、アジア諸国、とりわけ日本を含む東アジアと東南アジア諸国の国際比較である。これらの国際比較を通じて明らかになった点は、人口高齢化の潮流とそれがもたらす高齢化（者）問題の発生は、かつて欧米から波及した近代化の波よりもさらに確実に、かつ急速に世界の国々に伝播するのではないかということである。

最後に、「結論」において研究結果をとりまとめるとともに本研究が依拠した高齢化研究の理論的枠組みを整理し、今後の高齢化研究の方向について展望を行った。